計算

ローレル・テイラー

しあわせこいこいやってこいって
猫のお腹に書かれている
わたしは猫のしっぽにハシを釣り合わせて
「釣り合う」の妙な味にクルクル考えてみる
魚が元々天秤の右側に釣られたとしたら
左側が魚に合わせたのはなんだろう
銀うろこに銀両
金うろこに金両
色合わせで私たちのモノを計る時代
米に貝殻
きびにからし
似たモノが似たモノと一緒につられる制度が
常識の時代
マンサ・ムーサのマリからのハッジだったら
右側に金
左側に塩
モクテスマのアステカの帝国だったら
右側にカカオ豆
左側にタマル
価値の感覚が時につれ
私たちはカミやプラスチックや空想で
モノの類似性を判断する
この猫の価値はなんだろう
右側に猫

左側に数年前のインド・レストランの記憶
それで天秤が平らになるだろうか
しあわせが実際に来たら
ハシが落ちたら
猫のお腹の柔らかい毛を触ったら
猫におそわれたら
そうなったら猫の価値が変わるか
右側に猫
左側に真
人が真に向き合って掴み取って
皿に置く傲慢は猫にはなかった
真の感覚を皮膚で感触して
神経に伝わってくる重さを計る
それから猫の手を手に取ってスッと
塗られている背中を撫でてみる
真が粘土でできているに違いない
水で濡らして体温で温めて
私たちが評価しているものを揉んでゆく
猫　しあわせ　現金　うまい食事
竹　安全　自我　柔らかいベッド
価値の柔軟性
手のひらに重くて涼しくて
目の前にツヤツヤ明るく反射する
猫の頭を接吻してみれば
自分の価値もこのしあわせと
天秤される事実を実感する
人間の価値を決めるはずがないのに
わけがないのに
計られるわたしはその監視されている違和感と

一緒にじっと座ってみる
わたしと猫とわたしの視界にいない何かと
お腹がぐーぐーなってくる
伝票が届く
三人前の食事が金魚のうろこ六〇枚
税込
石のように硬くなった猫が手を伸ばして
わたしに爪を貸してくれる
ヒリヒリする指でわたしはハシを持って
食べ始める